

# 月刊 中東レポート

第96号

発行 ウニタ書舗  
東京都千代田区神田神保町1-52  
TEL (03) 3291-5533

編集 J.R.A.  
郵便振替 東京1-48443  
三菱銀行神保町支店 当座 9012656  
会員制 年会費24,000円

目次 次  
 混迷の「新世界秩序」と問われる人民の連帯  
 資料  
 ...漏洩は妥協のため(抄)  
 ...南部レバノンの「安全地帯」の現状(抄)  
 ...被追放者たちの現状  
 ...PLO内でのアラファトへの批判の高まり(抄)  
 ...バルフォア宣言記念日に際して  
 ...パレスチナ人は投降の合意に反対である  
 ...ハマスのよびかけ 第一〇三号(抄)  
 ...PFLP創立二六周年、インティファーダ  
 七年目を記念して  
 重要日誌(一九九三年一月一日)~(二月一〇日): 15

## 混迷の「新世界秩序」と問われる人民の連帯

一九九三年一月一〇日

米新政権の誕生で出発した九三年は、「内政のクリントン」を広言していたにもかかわらず、悩める米国の現状を改善することはおろか、全世界を混乱へと導いているだけである。

ロシアの経済改革という名の下で、エルツィン政権への支援を各国に強要したが、それはシオニスト国際資本のカラクリを暴露することになつたし、エルツィンのクーデターというシオニストのあり方を証明することにもなつた。

東京サミットでは世界経済の再建を唱いあげ、各国首脳がそれぞれに成功と賛美したが、国際経済は混乱を深めるばかりである。「ベルリンの壁の崩壊以来の歴史的なできごと」と喧伝されたPLOとイスラエルの相互承

認と暫定自治合意は、その第一歩の実施以前に崩壊情況に至っている。自治合意によつて沈静化されるはずだった人民の鬭いはこれまでにい激しさをもつて燃え上がり、帝国主義・シオニストを混乱に陥れ、その実現に「最大限の努力」を約束したはずのクリントン政権はなすすべも分からず放置、という情況に至つている。

世界各国で、国家主義が台頭するとともに、旧共産党勢力が復権しだしている。米国が打ち出した「新世界秩序」が混乱を作り出すだけでは、その現われである。唯一の超大国＝米国を柱とした世界再編をもくろんだ米＝シオニストは、旧「社会主義圏」に混乱をもたらしただけではなく、帝国主義陣営内にも個別利害を第一とする混亂を創り出した。一見、個別擊破して帝国主義の足下に膝まずかせているかに見える第三世界においても、人民の怒りは増大し、反撃に向かう巨大な波を準備している。

そうした人民の波は未だ個別利害から自由ではないが、新たな連帯が模索されている。今こそ、眞に人民の利益に立脚し、国際的な人民の連帯を創出していくことが問われている。

一 「新世界秩序」＝混乱の原因

a. クリントン政権の誕生と国際的な矛盾

「内政重視」を看板にし、自らを「シオニストである」と宣言したクリントン政権が一月に誕生。だが、クリントン政権はその出発時点から、欧州との矛盾を創り出した。中東関連では、ニューヨークの貿易センター爆弾と反原理主義キヤンペーンの中で、ラビン政権が自縄自縛に陥った追放問題のまやかしを策した。

の主催者であることを自認するクリントン政権の関知しないところで作られた同合意の発表は外交無能のクリントン政権の実態を曝け出した。これに対して、クリントンは、九月一三日のホワイトハウスでのなばなしの調印式で、自らの失態を取り繕い、さらにはそれを自らの外交政策の成果であるかのように策した。

だが、その合意が持つところの、そしてクリントン政権のニセの「成果」の矛盾が全面的に露呈してきている。

一月中旬のラビンの訪米に時を合わせて、二週間前（一〇月二九日の西岸で）の入植者への攻撃の主体が「アラバマ」であったことをセンセーションナルに発表し、クリントン＝ラビンが共同でアラファト議長にテロ非難を強要し、クリントンは「約束を守ることの大切さ」を強調した。

だが、他者に約束を守れと説教した舌の根も乾かないうちに、自分たちが約束を反古にすることは何ら問題ではないと言い出した。ラビンは、「一月二十五日に、一二月一三日からの撤退開始という「日付は神聖なものではない。それは単なる目標である」とそれを遅らせる方向を示唆し、以降それを繰り返した。それどころか逆に被占領地に大幅に軍を増強した。そして、調印式に際して「合意の実現に向けて最大限の努力を惜しまない」と宣言し、「あの合意はわれわれの対外政策の主要な達成物の中に位置付けられる。われわれはそれが稼働するようにならゆることをすると約束する」（一月一日、ゴア副大統領）と語っていたクリントン政権は、「そうした問題は両者間で決定することであって、自分の歴訪の中心課題ではない」

のロシアへの国際的な支援として、四月のバンクーバーでの会議で、そして五月の東京サミットで、帝国主義諸国の協調という形を作つて、なんとかごまかさんとしてきた。ロシアへの大規模な支援は、米国内の親シオニスト部分でさえもイスラエル、エジプトへの膨大な支援の削減は必死であることを示唆するに至つたし、内政重視というクリントン政権自身の公約と矛盾することが指摘された。が、クリントンは、「ロシア支援は米国の利益」になるとして、イスラエル、エジプトへの支援継続をもゴリ押しした。それは、各国からの支援額以上に流出しているロシア経済の現状と、そこで利益を得ているシオニスト国際資本のカラクリと狙いを浮かび上がらせた。

そしてエルツインのクーデターから流血の大惨事（一〇月）。天安門では人道・人権問題をあれほど叫んだ帝国主義は、そうした流血の大惨事にもかかわらず、相変わらずエルツインのロシア支援の継続を宣言した。それは、人道や人権とはまったく関係のない、シオニストの利害を第一とする「新世界秩序」の本質をだれの目にもはつきりさせた。

東京サミットでは参加者のほとんど全員が異口同音に成功を口にし、経済回復の楽天的な展望が語られた。が、世界経済の混乱、低迷はいつそう深刻化するばかりで、なんら回復の兆しもみせてはいない。はなはなしく樹立するはずだった欧州大連合は相変わらず矛盾を孕んだままであり、米国との矛盾はいつそう深刻になつている。米国も、NAFTAへと議会ではなんとか

賛成をえたが、反対の声は大きく、先行きの不安は否めない。クリントン政権は欧州との矛盾を有利な方向に持っていくためにも、APECを打ち上げてみたが、なんらの成果も作れなかつた。クリントンなどが将来の展望をどのように描いてみせようと、米国の支配を美化するための策動でしかない以上、そしてなんらの経済的な回復を作り出せず、矛盾のしわよせを他者に強要するだけでしかない以上、諸国間の矛盾は拡大・深化するのみである。

b. 中東における「新世界秩序」

昨年末の追放問題はラビン政権の和平過程への取り組みを、そして米国の主催者としての役割を試練にさらした。ブッシュ政権は、最後の奉仕として、イラクへの空爆で追放問題からの国際世論の拡散を策した。が、それは逆に自らの失態を露呈し、アラブの結束を作り出しただけであった。

シオニストは、ニューヨークの貿易センター爆弾（二月）などで、反原理主義キャンペーンを開戦した。こうしたキャンペーンの上にクリントン政権は、安保理決議七九九のまやかしを策した。だが、それは人民の怒りを誘つただけであった。そうした人民の鬪いの高揚に対してもラビン政権は三月末に被占領地の「封鎖」で対応した。が、追放と封鎖という犯罪は「民なき土地への（シオニストの）権利」、「（シオニストが）努力して砂漠を緑に変えた」などといった、シオニスト神話をつぎつぎと崩壊させ、シオニ

スルが牛耳る国際的な報道機関もシオニスト国家の実態を隠すことができないほどになった。東京サミットでは、イラク・リビアへの非難を行つ一方、最大のテロ国家、国連決議と人権の無視国家へのアラブ・ボイコットの解除をよびかけた。エルツインへの支援と並んで、破綻した神話の中であえぐラビン政権に救いの手を差し向けるあり方は、アラブ人民はおろか、全世界人民に、サミットの、そして「新世界秩序」の本質的な姿を明確にしただけだった。

サウジが仏から戦闘機などの購入を契約したことに対して、クリントンは八月、仏とのそれを解約して米製の武器を購入するよう、自ら売込を行つた。そして同時に、サウジの財政危機なるものを喧伝した。それは、サミットでの経済協力がまったくの空文句でしかなく、自国利益のためならなんでもするというおそまつな策動＝シオニストの実態を全世界人民の前に曝け出した。

破壊と殺戮だけを目的としたイスラエルのレバノンへの攻撃（七月末）とクリントン政権の「中立」は、もう一つのシオニストの実態の自己暴露であった。侵略と占領に対する人民の闘う権利は国際的に正当なものとして認められてゐるが、それを「テロ」と言いふくめ、自らのテロを正当防衛と言いつつの姿、あるいはそれに対する「中立」的に対応しようとする姿は、これまでに見えてきた中東和平交渉の行く末を暗示してみせるものだった。

その暗示を実際の姿にしたのが、PLO＝イスラエルの暫定自治合意といえよう。中東和平の実態を蔑ろにしている筆頭国はイスラエルであることは先にも触れた。そうした行為に反発を誘うのは言うまでもなかろう。

## 二 アラファト議長の孤立

りにも「正直」に示されるがゆえに、全世界的な反発を作り出していくのであり、こうしたあり方が決して長続きはしないことは火を見るより明らかである。

そうした決して長続きすることのない「新世界秩序」に、八二年以来模索してきた国家政治への登場とそれによる危機の乗り切りという目的を託さんとしたのが、アラファト議長であり、九月一三日のPLO＝イスラエルの暫定自治合意への調印である。

ホワイトハウスへの登場、クリントン、ラビンとの握手などなどは、アラファト議長の、そしてパレスチナ人民の長年の夢をかなえるかのようにも見えた。交渉そのものへの反対が圧倒的になつて、アラファト議長は、「新世界秩序」の虚像に目を眩まされて、大いなる誤算を犯してしまつた、と言つべきであろう。

a. なぜアラファト議長はそうした方向を選んだのか。

一言で言えば、すでに書いたように、国家外交への登場であるが、少し長くなることを承知のうえで、ここで少しごり道をとんよう。

八月末、あの合意が発表される数日前に、アサド＝シリア大統領はレバノン紙とのインタビューで、「ゴラン高原がシリアの領土であること、南部レバノンがレバノンの領土であることを疑う者はだれもない。が、パレスチナ側は困難を抱えている。ユダヤ国家はおろか、米国も『係争地域』という立場をとつてゐるからであ

る」ことを主張し、一月一日には安保理でリビアへの制裁の強化を行つた（このリビアへの制裁の強化決議に関しては、アラブ連盟ばかりか、OAUなども非難を行つた）。

クリントン政権内では、「嘘つき日本」とレッセルを貼つていたことが暴露されたが、これらはいかにクリントン政権が「正直？」であるかを暴露している。こうした手前勝手なあり方こそが「新世界秩序」の実態であり、それがあま

「イスラエル側の交渉姿勢を有利にする」という理由（にならない理由）で停止するよう働きかけるという始末。これに対して、PLOのアーマン代表は、「一月二八日、「ラビンがわれらが人民を殺害する者を称え、われわれが謝罪する」というあり方は、人民をたいへん悲観的にさせており、合意への支持は薄れている」とアラファト議長のあり方を批判した。

封鎖、逮捕、家屋破壊などの人権問題の未解決に加えて、イスラエル側がその罪を問わず、パレスチナ市民権を与えるよう要求している、裏切り者に導かれた「特務」の活動家狩りなどの弾圧はいっそうの激しさを増した。そんななかで、一人のイスラエル兵士、四人の入植者、四人の裏切り者の殺害で手配され、党派に関わらず尊敬されていた、ハマスの軍事指導者イマド・アクルの虐殺（一月二十四日）が起こった。次いで、ファッハ政治指導部からの説得で投降を宣言し、イスラエルの手配リストから除外されていたファッタハのタカの指導者の虐殺（同二八日）やあいつぐ虐殺、逮捕などは、人民の怒りを誘い、インティファーダはその初期の様相をもつて再燃した。

一一月三〇日に無差別乱射で負傷した一人は、「私は、今日射たるまで、和平合意を支持してきた。だが、兵士たちが乱射する方法を見たら、イスラエルが和平を望んでいるとはとても実に示される。にもかかわらず、アラファト議長は、インティファーダを非難し、妥協に次ぐ妥

ラファート路線への、そしてもちろんラビン政権への不信が拡大するだけであるのは当然であろう。しかもラビンは撤退（イスラエルは再展開と言っている）を延期することを示唆したばかりか、「インティファーダの六周年への対応」という名目で占領軍を大幅に増強した。

イスラエルのユダヤ人の世論はすでに同合意への反対が大きくなっていたが、パレスチナの世論のパロメーターともなると言われたビル・ゼイト大学の学生自治会選挙（一月二十四日）は反対派の統一候補が全議席を獲得した（この結果に対して、ファタハ支持者が学内で暴力を振るうなどの行為にて、入植者のそれとそっくりだという人民の非難を招いた）。

こうした人民の意志だけではなく、ファタハなどの合意支持者の中からもアラファト議長の独裁的なあり方への批判が拡大した。シャフィー氏、人民党書記長、ラボ氏、アラファトの側近と言われていた人士などが、連名で合意にそつた交渉のあり方を批判し、PLOと将来の自治政府の民主的なあり方を要求した覚え書きを配布した（一一月初旬）。これを受ける形で、なんと調印者のアブ・マーゼン氏などまでが、アラファトの独裁的なあり方を批判しだし、アラファト議長がよびかけた緊急執行委が開催できないという事態まで招いた（一二月一日）。そして、最終的に執行委は、交渉を監督、指揮する委員会を設置することを決定し、アラファトでも、アブ・マーゼンは「アラファトはまだ独裁的な力を有している」と言う始末であった。

## 二 クリストバランの歴訪とアラバ各國の動向

多くの反対派批判派が辞任して、アラファト議長は孤立してしまったのである。

多くの反対派 批判派が辞任して、「アラブフリーダム」のイエスマンだけの委員会になつた」とまで言われた執行委においてすら、アラファト議長は孤立してしまつたのである。

### 三 クリストファーの歴訪とアラブ各國の動向

当初、一〇月末とも言われたクリストファーの歴訪は延期され、ラビンの訪米を受けて、ようやく、交渉の再開に向けて再度の歴訪を行うことになり、一二月三日からそれが開始されることになり、クリントンが広言をしてきたように積極的な調停策を提示するであろうと観測された。が、パレスチナの自治問題に関しては、両者で解決を」と言って、クリントンの約束の反古を平然と行き、「米国の介入ではなく、両者間での解決を重視すべき」というイスラエルへの迎合を行つた。

他方、ヨルダンには、イスラエルとの合意を進めよう圧力をかけ、ラビン政権の狙つている個別合意の積み重ねへの援助を明確に示した。ヨルダンは、一一月二一日のフセイン国王のダマスカス訪問で「正当で包括的な和平を求める」ことを再度確認し、個別の合意を行わないことを明確にした。が、ヨルダンは、（国交に至る総合的な合意は、包括的な和平の課題として、行わないが、パレスチナの自治合意が存在する以上、個別分野での必要な合意を作つていく）という立場であり、実際、西岸におけるルダン銀行の支店の再開に関する合意など、経済的な関係づくりを推進している。

八八年のPLOのパレスチナ国家宣言は、四年の国連決議を基礎に、パレスチナ国家の創設をうたった。イスラエルは、英國信託統治の期限（四八年五月一五日）が切れる直前に独立宣言を行ったが、そこでは国境線を明確に示さなかつた。アラブ諸国はアラブに相談することなく行われた国連決議を無効として、この新しく独立を宣言したユダヤ国家と戦争になつた。予想に反してアラブ側は敗退し、停戦ラインが作られた（四九年。ただし、通常は四八年ラインとよんでいる。イスラエルのみはこれを六七年ラインとよぶ）。

さらに六七年、イスラエルは大規模な侵略（第三次中東戦争）を開始し、新たな停戦ラインが作られ、安保理決議二四二はイスラエルの即時撤退を要求。マドリッドの会議ではこの決議を基礎にするとした。こうして見てくると、係争地域とは、四七年国連決議と四八年ラインとの違いにあるように見えるが、実際はまったく違つてゐる。イスラエルが旧英國信託統治領のパレスチナ全域への主権を主張しており、米国もそうしたイスラエルの主張を認め、パレスチナに自治しか認めない方向をとつてゐるから

パレスチナ国民憲章では、パレスチナ全土の解放を掲げているが、交渉はそれに矛盾した出發であること、加えて、エルサレム問題の先送りや、パレスチナはヨルダンとの統一代表団の一部でしかないことなどから、パレスチナ人民はこうした交渉そのものに反対を表明していた。そして、人民の闘いの高揚は、イスラエル側に「ガザ撤退論」を作り出した。一步も引かないと主張していたシャミール前首相ですら、ガザ撤退を示唆するまでに至らせた。三月以降こうした「ガザ撤退」論がイスラエル側から叫ばれだしたのに対して、アラファート議長は西岸の一帯を含めた、「ガザ、ジエリコ第一」論で対応し、秘密交渉から、合意へと至った。

その合意の発表に際して、PLO筋は、アラブのある国（シリアを指す）は、包括和平といふが、パレスチナが最終合意に至るまで待てない、つまり、暫定合意の時点を包括和平の出発点とすることを主張していた。だから、われわれは独自の交渉での解決を模索したのだ」と単独合意を正当化した。が、こうした論理は、シリアはもちろん、カドゥミ政治局長などの反対を作ることになったし、合意のあいまいさ、あるいは決議二四二をめぐる当然の解釈を要求して交渉を進めてきた交渉団を無視しての秘密交渉と合意に現わされた妥協は、交渉団や執行委員会

そして、二月二三日、クリントンとラビンの働きかけに速答するように、アラファト議長は「暴力行為の非難」を行ったが、それは人民の意志を逆撫することになった。

それを証明するのが、ファアハのタカの武装闘争再開宣言（二月十九日）である。もちろん、これは、ハマスなどの反対派による武装闘争とインティファーダの継続、人民のそれへの支持を背景にしている。他方、極右入植者の暴力行為の拡大（入植者自身が、ラビン政権に対する「インティファーダ」を宣言）とイスラエル軍のそれへの保護はパレスチナ人民に闘うことの大切さを再度認識させた。

さらに、入植者は、二月一日に、現在一三〇ある西岸の入植地を一挙に倍増するという決議とパレスチナ警察への不服従宣言をした。入植者たちは、軍の基地から大量の爆薬を盗んだのをはじめとして武装を強化しているし、「もし、アラブ人が、それが警官の姿をしていようともなんであれ、自分を停止させようとするなら自分はそいつを射殺する」といった宣言を何度も繰り返している。

現場の兵士の保護だけではなく、ラビン政権はそうした入植者の反乱を口実に、パレスチナ警察の権力範囲ばかりか、「自治」の中身を切り縮めようと策している。他方の、パレスチナ

る。そうしたパレスチナの兄弟たちを支援していくためにも、アラブの統一した対応が必要である」ということを強調した。

世界各国に争地域は存在するが、歴史や住民の意志とはおかまいなしに帝国主義が勝手に国境線を引いて中東ではそれがいつの間にか

である。決議「二四二」を基礎にするとして、他方では四八年ライン以上のイスラエルの領有を認めることは矛盾であるが、実は「二四一」の英語文自身がそうしたシオニストの意向を受け入れてあいまいな表現になつてゐるし、これがシオニズムの三長の論據によつてゐる。

人民の長年の願いであつた建国につながると主張し、インティファーダの停止指令を含めて、それを推進してきた。が、アラファト議長はこれこそがパレスチナをはじめとする多くの反対を招くことになつた

パレスチナ一〇組織をはじめとするPLOは、イスラエル合意への反対派は、被占領地内での人民の鬪いの高揚に示されるよう、意氣軒高である。パレスチナ人民の内部では、「アラブ世界から裏切り者と烙印を押されたサドトです」という評価が定着した。そして、前述したように、人民の鬪いはかつてないほどに高揚し、アラファトの側近からも離反が相次いでいる。にもかかわらず、反対派は一〇組織が提唱した大会を開けないでいる。主な原因是、アラブ諸国の現状の反映だと言われている。が、それはまた、唯一の超大国が推進する戦略に対抗してパレスチナ建国を勝ちとつていく戦略的な方向を提示しないことにも別の原因がある（が、これは全世界的に個別利害を優先するあり方が主流となっているなかで、パレスチナ革命だけにそれを求めることが無理があり、堅実な闘いを推進するなかで人民の連帯を創り出していくことでしか勝ちとれない）。最大の問題は、

四 個別利害と問われる人民の連帶

て対応しているのである。

「新世界秩序」の唯一うまくいっているところ、その地球規模の実行への足場固めの場としての中東とも言われたが、「外交無策のクリントン政権」と言われるその対応は、アラブ諸国の反発を招き、「新世界秩序」そのものの破綻への道を掃き清めることになっている。

クリストファーのシリアとの調停工作は「成

たことにそれが端的に示された。アラファト議長は、ここでも孤立を味わうことになった。  
さて、こうした緊張は、もちろん西岸をめぐるヨルダンの個別利害と密接に絡んでいるが、ヨルダンは、湾岸戦争で冷えきった米国との関係の改善を、イスラエルとの個別の部分的な関係の改善の中で作っていくことを策している。  
クリストファーは、こうしたヨルダンの意向を知りつつ、さらに、国交を含めた全面的な協力関係へとバッショウした。だが、アラブ総体の意向がアラブ・ボイコットの解除は時期尚早としている（一月二二日、同連盟会議でのマギド事務局長発言）ことに示されるように、個々の分野での協力関係を推進することはあっても、シオニストの意向をそのまま受け入れるようなことはフセイン国王の政治生命にもつながることであり、決してないというのが実情である。

これはアラファト議長が、パレスチナ独自の銀行、独自の通貨などを主張していることと矛盾する（ただし、PLO内の意見は決してアラファト議長のそれが多數派ではない）。加えて、フェイン国王は、一月二三日、新議会の開催にあたっての演説で、エルサレムを含む第三次中東戦争で占領されたヨルダンの「主権の回復」をと発言した。

ヨルダンとの関係ではすでに連邦制をめぐって意見の違いが表面化していたが、こうしたことが、ヨルダンとアラファト議長との関係をいつそうギクシャクしたものにした。アラファト議長が、一二月六日、フェイン国王との再度の会談予定をキャンセルして、突然出国してしまつ

闘いと交渉を文脈させていることである。被占領地内人民の闘いは、日々、「合意以降最大規模」という表現が用いられるほど、高揚している。九月二三日の同合意の調印以降、二月一〇日現在で、パレスチナ側が三八名、イスラエル側は一八人という死者数を記録しているが、これは、単純に月平均にしても、三月末の封鎖をもたらしたときのそれを大きく上回っている。かつ、二月五日、テルアビブ地区で、サスマシンガンを用いた作戦が展開された。四八年ライン内部でのこうした作戦は、封鎖後初めてのことであり、ラビン政権を震えあがらせた。それに呼応した南部の闘いは、一月二六日、ハズバラによるイスラエル軍の基地二つ、南レバノン軍（SLA）の基地八つへの大規模な同時攻撃で、SLAの二つの基地を一時的に占拠し、二二名を捕虜にするという戦果を筆頭に、連日作戦が展開され、占領軍とそのカイライ＝SLAに大打撃を与えていた。さらにそれは、イスラエルのラハドに対する評価の再検討（ラハドの地位低下に至り、ラハド派とシーア派のアブダラー派の衝突報道という状況になっていた）。こうしたことから、パレスチナ、レバノンの人民の間では、「闘いこそが占領をなくする唯一の道であり、かつラビンのアラファトに対する評価もラハドへのそれと同様になることは目に見えている」と言っている。

シリアは、クリストファーの歴訪に際して、中東和平過程への関わりを強調し、在シリア・ユダヤ人の出国査証の緩和や不明イスラエル兵士の捜索問題での米議会との協力を提示した。〈ゴランの返還で進展があつた〉とか、〈レバノン南部のレジスタンスの活動を抑えることで合意があつた〉などの観測もなされているが、アサドリクリントン会談に象徴されるように、米国との関係の改善の中で、二一世紀に向けた、すなわち「新世界秩序」後の世界での活路を見いだすことを求めているというのが実際であろう。さて、クリストファーはシリアには一回、アラファト議長とも二回の会談を行いつつ、レバ

功」し、一月のクリントン＝アサド両大統領の会談と、和平会議の再開で合意を作った。シリアは、PLO＝イスラエル合意に、「反対もないが、賛成もしない」ということを公式見解としているが、実際には、「同合意はパレスチナ人民の長年の願いをかなえるものではない。二四二、三三八、四五五を基礎にした「ランド・フォード・ピース」と包括的な解決こそが大切である」というハッダム副大統領の発言（一月二八日）に示されるように、個別和平を進めんとするアラファト議長のあり方を非難している。また、前述したフセイン国王のダマス訪問は、マドリッドの原則をなし崩しにせんとするシオニストの戦術に絡めとられることのないよう、

国際的にもそうした土壤が形成されている。歐州やロシアなどの国家主義者の台頭とポーランドなどに見られる共産主義者の復権という、一見矛盾したなかにそれが示されている。「新世界秩序」が各国の個別利害を優先する方向にあることから国家主義を創り出し、他方で、一時は帝国主義の宣伝に幻惑された人民が再度社会主義を見直していることの表現である。かつて共産主義に対抗するためにCIAを軸に原理主義組織を積極的に育成した帝国主義が、今やそれに悩まされる構造に陥っているのとまったく同じ構造が国家主義の台頭である。他方、そうした実態を見抜いた人民が再び社会主義を見直し、結束し始めているのである。

シオニストは、反原理主義の宣伝に加えて、こうした各国での国家主義の台頭に警鐘を鳴らしている。が、ユダヤ原理主義や根本問題を抜きにして騒ぎ立てる論理矛盾と、常に「悪」の存在をもって自らを正当化しようとする姿は自らの実態を曝け出すことになっている。

そして、人民の鬪いと社会主義勢力の復権は、シオニストのデマゴギーやかつての「指導部」の誤りをのりこえて、新しい人民の連帯を作り出すことになろう。

ラビンが主張していた個別の和平の積み重ね方式であり、ラビン政権が何度も繰り返している、アラブという枠組みの解体と中東としての再編、そこにおける経済協力という名での個別利害の促進＝混乱を創出しようということの鮮明化でしかない。

アラブ諸国は、PLO＝イスラエル合意の後、モロッコのラビン一行の公然たる受け入れ、チュニジアの多国間交渉の開催＝すなわちイスラエル代表団の受け入れ、諸国の経済協力の方向など、これまでのタブーを解除している。が、シオニストの要求を全面的に受け入れることには反発し、アラブという枠組みを堅持していこうとしている。

唯一の超大国となつた米国の力を背景にしているという世界的な現実から、「新世界秩序」を一定受け入れざるをえないものとしつつ、同時にそれが近いうちに破綻することを見越し

ノンへの訪問はしなかった。唯一、ハリリ首相とダマスから電話で話しただけで、「二月九日、  
「シリア、レバノンが和平過程の再開で合意し  
た」と打ち上げた。これはレバノン国内で「レ  
バノンの無視」だという非難の声を作り出すこ  
とになった。加えて、国連総会で、「イスラエ  
ル軍の即時、全面、無条件の撤退」をうたった  
安保理決議四二五の再確認でのあいまいな対応  
と、ロシア、ノルウェイを引き連れての和平過  
程からの同決議の取り下げ方向が提示されるに  
至ったのだから、レバノン人民の怒りが大きくな  
ったのは言うまでもない。

クリストファーの歴訪に示される米国の対応  
は、要は、マドリッドの原則の反古、すなわち



は明確である、と指摘する。

同様に、企画されているガザ、アリー・ハの機関から除外された。

立することを約束した宣言を発した。言うまでもなく、アラブ・イスラム世界の中

領地内外のパレスチナ人においては、厳寒の中で毅然とした闘いを続ける彼らの姿は、人民の圧倒的な支持を作り出し、彼らの言動は、PLO指導部や交渉団のそれよりも重みをもつて人民を動かした。

ランティスティ氏が話した人権、国連決議、アーデル・イマドが触れた国際的に正当な人民の反占領闘争の権利など、パレスチナ人民が正当な権利を行使し、その希いを実現するためにも、そして、全世界的にも混乱を創り出している帝國主義とシオニズムの勝手な行動を阻止するためにも、国連の本来の役割と国際的な人民の連帯がいつそう問われていると言えよう。

此判の高木少（小）

アツディヤール紙、九三年一二月六日

アラファートPLO議長はPLO内諸機関への独裁的なあり方を拡大しているが、それは彼と彼の側近との緊張、反目を高めている。それは、将来のパレスチナ自治地域における政治、自治そのものを脅かすことになっている。

PLOとイスラエルとの合意を支持する者たちによる宣言、動向をフォローしている観測筋は、発表された宣言はチュニスのPLO指導部内の特定の政策への大きな批判を含んでいる、と指摘する。観測筋は、アラファートを一方の旗頭とし、彼の補佐役であったアブ・マーゼンやアブ・アラ（ともにイスラエルとの合意の制作者たち）をもう一方とする、双方の意見の違いは明確である、と指摘する。

導くことができるが、同時にそれは占領に奉仕することもできる」と語ったという。彼は、アラファートのあり方に対して、「未だ独裁的である」として、将来への不安を表明している。彼はアラファートの過大なそして非現実的な楽観論を批判する。「彼は自らの支持者に誤った情報を流している。彼は、イスラエルが承認する前であっても本人がアリーハに行くと語っている。」 彼は、イスラエルとのかなり困難な交渉の対象であることを知りつつ、獄中者の釈放を約束している。彼は多数の難民の帰還を約束している。この問題は多国間交渉の難民部会での今後の討議の議題であるにもかかわらず、「だ」とアブ・マーゼンはそうした例を示した。

PLO指導部への覚え書き提出がある。中心的には、〈問題は同合意にあるのではなく、むしろそれを実行に移す方法にこそある〉ということを基礎にしている。そこではイスラエルとの交渉におけるアラファートの展開の仕方、彼の決定に関する独裁的なり方、パレスチナ経済再建開発評議会の長官を要求する彼の姿勢を批判している。そして、1、決定過程における民主的なあり方、2、イスラエルとの交渉を監督し、指導する委員会、3、パレスチナ経済評議会を要求している。

アブ・マーゼン、アブ・アラ、N・アムロ（PLOの元モスコウ特使）などがその覚え書きに名を連ねているという。

彼らは、パ国民党、ワシントン交渉の代表団、アシュラワイ女史などからの支持を受けている。アシュラワイは、最近、（人権問題に関する）PLOワシントン事務所の代表になることを拒否したと伝えられているが、PLOの内部の変化をという要求、そしてそうした要求の覚え書きの連名者を支持すると語っている。彼女は、変化の機能を有しないかなる政府も保守化、化石化するとしたうえで、アラファートの権力の限定を支持すると発表した。

『言うまでもなく、アラブ・イスラム世界の中には、シオニズム運動がパレスチナに郷土を設立することを約束した宣言を発した。

「安全地帯」では、SLAの頭目テハドが交替させられるという噂がある。一般的に、最有力候補として口にされているのは、現在同地帯の西部地区責任者のアクリル・ハシェムである。ハシェム本人は、「イスラエルは地域の指導部を変えることを望んではないい」、と否定した。彼はまた、いくつかの障害が和平を遅らせているが、レバノンとイスラエルとの和平合意はそう遠いことではない、と語った。

彼は、いかなる合意もSLAの存在の維持を基礎にすること、SLAとレバノン軍との統合を編入になる、SLAメンバーは地域の安全を維持するのに最高の質を有している、と語った。これは言い換えれば、イスラエルがレバノンの政府と軍がイスラエルの北部国境地域の安定を保証するまで、南部の占領地域を撤退することはないという印しとも言える。

## 被追放者たちの現状

南部レバノンのイスラエルの占領地（＝「安全地帯」とレバノン軍との対峙線の中間（＝

「うことで、それが憲されている。それが眞中に戻るということであつても、皆がともに帰還できるということを嬉しく思っている」と語った。

ランティスイは、再来した冬の天候が彼らの生命を脅かしており、国連は決議に沿つた即刻の帰還を保証すべきである、とよびかけた。

「われわれは国連安保理がイスラエルに人権侵害を停止し、われわれの即刻の帰還を含めた、国連決議のすべてを遵守するよう告げるときである、と声を大にして言う」、「全世界が人権について云々している最中で、われわれの被追放から一ヵ月が経つた。安保理は、われわれの即刻の帰還という自らの決議を、そしてさまざまな人権侵害を停止させるべきであるし、そうした責任を遂行すべきである」とイスラエルの人権侵害などを非難し、国連の果たすべき役割を強調した。また、国連の役割についてなんら言及していない「(PLO)とイスラエルとの

西岸のJ・プロス弁護士を通して、そうしたことが起こらないよう公式の保証を取り付けようと模索していると語った。

だが、アラファト派が広言してきた獄中者の釈放がうやむやにされているばかりか、仮に一定の釈放ということになってしまっても、彼ら「原理主義者」と烙印を押された者の釈放はないことをラビン政権が宣言しているように、そしてなによりも合意に沿った交渉ですら反古にしようといいうラビン政権であるから、彼らの要求が受け入れられることはまずなさそうである。一四名の宣言の後、彼らに加わる者の数がさらに増えているということも、それは示される。

二四名の誤認を含めた、四五名という大量の追放は、国際的な非難を招いただけでなく、人民の鬨いをいつそ高揚させた。自らの失敗が招いた現実に驚愕したラビン政権のさらなる弾圧措置＝封鎖は、追放とともに、シオニスト連邦の神話を崩壊させることになったし、国際連帶

最近、マルジヤヨーンで、弱体化している南レバノン軍（SLA）のキリスト教徒指導部の支持者とシーア派指導者R・アブダラーの支持者の間で対立があった。今やアブダラーは地域における「イスラエルの強力な男」となっている、と何人かが語った。アブダラーは、ベイルートで殺されたハズバラーメンバーの埋葬を「安全地帯」内の出身地で行うことを認めるなどして、地元の人々との関係を改善しようとしている。

（無人地帯）に彼らが追放になってから一七日で一二ヵ月目に入った。これが最後の日になるはずである。彼らのほとんどは、家々里への帰還を楽しみに、日々を送っている。W・アドルニは、「言うなれば、カウントダウンが開始された、ということかな。われわれの帰還が日々近づいているということが皆の心をなごませている」と言う。

また、J・シャーバンは、「われわれのだれも

たイマト・アケルの兄弟アーテルも追放者の一人である。アドルは、兄弟の死亡に対する悲しさを隠しきれないながら、「私の兄弟が（アラファト）のような投降者としてではなく）殉教者として殺されたということに誇りを感じている。彼の殉教は（アラファトの武装放棄指令にもかかわらず）武装闘争が未だ継続していることを証明するものである」と言葉少なに語った。

また、同日、一四名が、帰還がすなわち獄由

渡された機構（PLO）そのものと諸機関を取り返すことである。アラファートが軍事的にZに對決していた間は、われらが戦線（GCのこと）は政治的な反対派としてあった。彼が軍事的に對決してこないかぎり、そうした立場は続く。だが、もし軍事的に對決してくるようになつたら、われわれも彼に軍事的に對決することになる。

（ジブリルは、彼が八八年のパンナムの爆破ロカビー事件に関わっていたというPLOから非難を否定し）、アラファートは西側世界に誤った情報を流すことによって何かを得ようとしている。アラファートはまた、モサドにもGCなど的情報を流しているし、彼の保安機関はハマスを叩くことに関してイスラエルの諜報機関と協力している。

PLO＝イスラエルの合意に反対する諸組織は今月中に新たな同盟を宣言する予定である。（反対派）内部には違った見解が存在しており、たとえばハバシュはアラファートの残滓を引きずっている（前号資料、ハバシュ・インタビューを参

シオニズムと直面しているからである。もし、われわれが問題は二〇年もあれば片がつくと考えたとしたら、自らをだましていることになる。そうだからこそ、われわれは最低限、アラブ世界への鍵を奴らに渡してはならない。こうした最低限の任務を破ったのがあの裏切りの合意なのである。

(民族イスラム戦線の役割、とりわけ P L O )

1994年1月31日 第96号

アラブ民族を分断し、発展を押し止めるることを意図していた。これは、植民地主義が経済的軍事的にアラブ地域を支配し、シオニズムにおいてはその「大イスラエル」の野望を遂げさせることを可能とした。今日、こうした帝国主義とシオニズムの野望はわれらがパレスチナ人民、アラブ民族の将来に対する大いなる脅威となっている。とりわけ、ラビン＝アラファトの取引（「自治合意」）への調印の後、それはいつそう顕著になってきている。この取引では、パレスチナにおけるシオニズムの歴史的権利なるものを認め、パレスチナ人民の帰還、自決の権利をあいまいにし、エルサレム問題を無視し、さらには、パレスチナの地のすべてを無人の土地であり、シオニストがどこにでも入植でき、いかなる数のユダヤ移民をも連れてくることが可能であるかのようにしている。

この取引はまた、単にシオニスト擬制国家を認めるだけではなく、「新しい中東」という名の下での、大がかりな国交正常化キャンペーンを開展することを許し、取引自体がアラブ全体、イスラム地域へのシオニストの侵略への切っ先をなし、シオニスト国家が経済的軍事的に支配勢力となるんとすることへの支援にもなっている。

心部という戦略的な位置にあることから、パレスチナが選ばれた。実際、この宣言はパレスチナの民族的アイデンティティを壊すことを目的とし、パレスチナ人民を離散させ、他のアラブ諸国への、とりわけ民族解放、進歩勢力に対する

パレスチナ一〇組織は、ふたたび、アラファートの取引がわれらが人民を、そしてその民族的希望である解放、帰還、自決、民族的な独立への道を代表するものではないことを明確にする。これに關わることでは、アラファートによるニセ情報、情報操作のすべては、決してわれらが人

(PLO指導部との)  
戦端は開かれた。

われは、自らを犠牲にすることを厭わない、数万の若者を有している。アラファートが行つたことはパレスチナ人民の利益を阻害こそそれ、決

してそれに適うものではない。たとえば、投降の合意は（離散の）キャンプの難民に何ももたらしはしない。帰還はおろか、彼らの生活条件の改善もない。被占領地でも基本的にそれは変わらない。むしろシオニスト国家の政治的軍事的経済的な支配を強化するだけだ。ガリリーの（四八年ライン内の）パレスチナ人からは約七〇%の支持があるという。それは彼らがイスラエル市民と同様の権利を手にすること、そして彼らの地位を強化することにつながると期待しているからである\*。

解放の道は決して容易ではない。それは最初からそうであつたし、われわれは数世代もかかる仕事として位置付けてきた。

われわれはこの解放という事業において、パレスチナ独自の立場というものに常に反対してきた。なぜなら、それはアラブ・イスラム世界との関わりのなかでこそわれわれの最良の利益があるからである。また、われわれが闘つてい

ハマズのおひかけ 第一〇三号

フレステイン・アル・モスレマ誌  
一月号

\*聖戦の旗を高く掲げよ!!

われらが人民を代表してい

ガザ・アリーハ合意に調印

取引の最も悲劇的な点は、

存在の権利を承認し、パヒ

レッテルを貼って非難し

のよきに田畠に元されてしまふ

の支配を行うという米＝シ

## 「われらが忍耐強い大衆へ

て、原理主義とレッテルを

はまた、パレスチナの大義

これが原理主義と革命の  
ことである。

占領に対する鬪いにおける

われらが運動は、われらが聖なる土地において、占領に対する闘いにおける指導的な役割を

担っている。カッサム大隊の信念の息子たちを筆頭に、アブダラー・アッサム、イスラミック・ジハード、赤いワシ、ファタハのタカなどがレジスタンスと殉教の輝かしき諸例を示し、占領当局の弾圧措置のいっさいがわれらが人民の祝福されたインティファーダに対してなすすべもなかつた。そんななかで、敵シオニストどもは、パレスチナの大義を抹殺する道具としてアラファートのグループを見いだした。われらが人民、自由の戦士たちに対抗する部隊として利用しようというのである。敵の利益に奉仕し、シオニスト入植者どもの安全を確実にすること以外にはなんらの任務も有さないものを「パレスチナ当局」と認めるということと引き替えに、である。

あの恥辱と抹殺の取引のため、すなわち自らの利益のために、シオニストは、アラファートを支援し、徹底的な宣伝を展開している。が、あらゆることは敵は敵でしかないという、眞実を暴露している。占領当局は存続し、弾圧措置を強化している。大規模な「搜索」、いたいけな子どもに対する襲撃、果樹の根こそぎ、自由の戦士たちに対する襲撃、活動家の逮捕などなど、同様の弾圧が継続している。

「われらが戦闘的な人民へ」

いわゆる「ガザ・アリー・ハ合意」への調印は占領軍の撤退ではまったくないし、われらが人民の自決の権利を保障でもない。逆に、パレスチナ人民を内戦に追いや込もうという米・シオニスト陰謀としてある。反占領の軍事的作戦を阻止するアラファートが宣言し、投降の取引を拒否する反対派への弾圧を約束した以上、それは

筆頭に、アブダラー・アッサム、イスラミック・ジハード、赤いワシ、ファタハのタカなどがレジスタンスと殉教の輝かしき諸例を示し、占領当局の弾圧措置のいっさいがわれらが人民の祝福されたインティファーダに対してなすすべもなかつた。そんななかで、敵シオニストどもは、パレスチナの大義を抹殺する道具としてアラファートのグループを見いだした。われらが人民、自由の戦士たちに対抗する部隊として利用しようというのである。敵の利益に奉仕し、シオニスト入植者どもの安全を確実にすること以外にはなんらの任務も有さないものを「パレスチナ当局」と認めるということと引き替えに、である。

あの恥辱と抹殺の取引のため、すなわち自らの利益のために、シオニストは、アラファートを支援し、徹底的な宣伝を展開している。が、あらゆることは敵は敵でしかないという、眞実を暴露している。占領当局は存続し、弾圧措置を強化している。大規模な「搜索」、いたいけな子どもに対する襲撃、果樹の根こそぎ、自由の戦士たちに対する襲撃、活動家の逮捕などなど、同様の弾圧が継続している。

「われらが戦闘的な人民へ」

いわゆる「ガザ・アリー・ハ合意」への調印は占領軍の撤退ではまったくないし、われらが人民の自決の権利を保障でもない。逆に、パレスチナ人民を内戦に追いや込もうという米・シオニスト陰謀としてある。反占領の軍事的作戦を阻止するアラファートが宣言し、投降の取引を拒否する反対派への弾圧を約束した以上、それは

不可避だと奴らはみている。シオニストは、アラファートにハマスに対する行動を唆し、内戦の火をつけようとしている。

われわれ、ハマスは、われらが人民と全世界に對して、われわれは敵がこの機会をものにできないようにするし、敵が求め、願つてゐる内戦を避けるように最善の努力を払うことを、はつきりと宣言する。もちろん、占領に対するわれらが聖戦は、われらが郷土を解放し、究極的な勝利が達成されるまで継続することを、同時に宣言する。

PLO「指導部」の投降が、敵シオニストをしてアラブ、イスラムの中へと浸透することに道を開いた。いくつかの国家においてはシオニストとの正常化の準備があつたが、彼らはパレスチナの立場に「配慮」してきていた。あの悪魔の取引への調印の後は、シオニストとアラブ、イスラムの多くの公式な会議が行われるようになった。いくつかの国はシオニスト擬制国家との国交、関係の強化の方向を開拓している。さらに、敵は、イラクなどへの不当な制裁が行われているのに、アラブ・ボイコットの解除を云々している。

一人の人物が全人民の名前で決定することができようか？ アラファートはわれらが人民を代表していないことを明確にした。彼は自ら大衆から孤立し、敵と同盟することを選んだ。言い換えれば、われらが人民は彼が調印したいかなが人民にレジスタンスの新たな戦略を見いだし、こうした屈辱的な取引を破棄することへの協力

A、在外において

- 1、アラブ、イスラム諸国にガザ・アリー・ハ合意の拒否をよびかけ、シオニスト擬制国家をボイコットし続け、パレスチナ人民の希いと基礎的な原則を投げ捨てたPLO「指導部」の例に続くことのないように、よびかける。
- 2、アラブ、イスラムの大衆に、ガザ・アリー・ハ取引を拒否し、パレスチナ人民との連帯を宣言し、その戦闘的な勢力への支援を明確にする。されど、その戦闘的な勢力への支援を明確にする。されど、その戦闘的な勢力への支援を明確にする。
- 3、国際社会において、われらが人民の正当な大義を支援し、パレスチナの大衆的な諸機関、施設への援助を行うよう、よびかける。

B、内部に関して

- 1、ハマスは、最近の英雄的な作戦を展開し、闘いを継続することを明確に示したカッサム大隊を再建を推進する。
- 2、アラファート、イスラエルが撤退交渉を遅らせていると非難。
- 3、アラファート、イスラエルが撤退交渉を遅らせていると非難。
- 4、国際的な主体と組織に、人権を侵害し続けている敵シオニストによる弾圧行為を非難し、入植者どもによって展開されている行為を非難するよう、よびかける。

隊の英雄たちと殉教者たちにあいさつを送る。同時に、すべてのパレスチナ諸組織、諸勢力が占領に対して軍事行動を拡大するよう、よびかける。

2、一部の疑惑多い部分によってなされたインティファーダの停止と占領に対する軍事行動の停止という声明を非難する。

3、あらゆる勢力、組織、人士そしてわれらが人民大衆が恥べき取引を打倒するために統一するよう、また、敵がパレスチナの内ゲバ、内戦を作る機会を与えないよう、よびかける。

4、インティファーダの継続の必要を再度強調し、ガザ・アリー・ハ勢力による幻想に惑わされることのないよう、よびかける。

重要日誌  
一九九三年一月一一日～二月一〇日

一月一日

- PLO、多国間交渉経済開発代表、アラファートの姿勢に抗議して辞任。
- ハッサン皇太子、パへの協力をしているが、パ側の姿勢はアラブのギャップを大きくするものであると批判。また、ボイコット解除は自殺行為。
- エルサレムとガザ、ユダヤ人への攻撃。攻撃者一人射殺され、一人は負傷。他方、エルサレムでは、入植者五〇人がアラブの家を占拠。クリントン・ラビン会談。これに合わせてイ

一月一二日

- ガザ、兵一人を刺殺、軍の発砲で三人負傷。
- 入植者は各地で乱暴狼藉。ラマラ地区のファラハ、入植者への攻撃をよびかけのビラ・シンベトは三人のファタハを逮捕。他方、エル

一月一七日

- ガザ、兵一人を刺殺、軍の発砲で三人負傷。
- 入植者は各地で乱暴狼藉。ラマラ地区のファラハ、入植者への攻撃をよびかけのビラ・シンベトは三人のファタハを逮捕。他方、エル

一月一六日

- サイダ、アラファート支持者射殺された。
- ムサ、米のイスラエルへの武器供与は地域の和平に奉仕しない。

一月一六日

- ガザ、入植者への攻撃。

一月二五日

- 南部、レジスタンスの大攻撃、SLA一二人を捕虜に。イスラエル兵一人負傷。イスラエルはバーレック地区の三ヵ所を空爆。他方、ラハドの地位低下（本文参照）。

一月二七日

- ガザ、兵一人を刺殺、軍の発砲で三人負傷。
- 入植者は各地で乱暴狼藉。ラマラ地区のファラハ、入植者への攻撃をよびかけのビラ・シンベトは三人のファタハを逮捕。他方、エル

一月二四日

- ガザ、イマド・アケルが「特務」に射殺された。Z兵士一人も負傷（本文参照）。
- ビル・ゼイト大学学生自治会選挙、合意反対派が圧勝。

一月二五日

スラエル軍が、一週間前の西岸の入植者殺しはファタハだった、と発表（本文参照）。

一月三日

- ゼネスト、人民の鬪い、三人が負傷。
- アラファート、ファタハ・メンバーによる入植者殺害を公式に非難。クリントンは、これを非常に肯定的なサインと称えた。が、イスラエル側はこれでは不十分という対応。

一月四日

- アシュラウイ、PLO内部の民主化のよびかけを支持するし、そうした連合が組織されたことを歓迎する。

一月五日

- 被占領地、パ国家宣言五周年記念の祝賀。エルサレムの集会には、アラファートからの電話メッセージ。
- 西岸、ヘブロン地区で入植者への攻撃、負傷させたが、逆に射殺される。

一月六日

- ガザ、入植者への攻撃。

一月二〇日

- PLO、民主化要求、いっそう拡大。

一月二二日

- アラファート、イスラエルが撤退交渉を遅らせていると非難。

一月二三日

- フセイン王、ダマス訪問、正当で包括的な解決を再確認（本文参照）。

一月二四日

- マギド、独立五〇周年記念日演説で、主権の放棄は決してない。四二五などの国連決議の遵守こそ、包括的な和平の要。レバノンの再建を推進する。

一月二五日

- ガザ、イ・ジハード決死作戦、車でZ車に体当たり。一人射殺された。

一月二六日

- フセイン王、ダマス訪問、正当で包括的な解決を再確認（本文参照）。

一月二七日

- アル・アシーフ（ファタハの武装組織）、アル・アシーフ、占領の継続とパ人の権利の問題があるかぎり、ボイコットの理由と必要性は変わらない（本文参照）。

一月二八日

- マクダ（解任撤回云々の）アラファートからの新しい指示も拒否する。アラファートにはそのような指示をする権利はない。

一月二九日

- 南部、レジスタンスの攻撃。SLA一人死。

・ガザ、大規模な人民の闘い、三四人が負傷。  
・カイロ、首相を狙った車爆弾。

一一月二六日

・エルサレム、「特務」がハマス指導者を射殺、二人逮捕。ヘブロン地区、入植者の乱暴づく。パ側は投石で対応、軍はパ側に発砲。ガザでは、裏切り者の射殺。

一一月二八日

・ガザ、「特務」がタカ指導者を射殺し、約二〇名を逮捕。エルサレムでは、ハマスの四人が逮捕された。各地での人民の闘いで六人が負傷。占領軍への攻撃で、兵士一人射たれて負傷。ハッダム、合意はパ人民の願いをかなえない。

国連決議に沿った包括的な解決こそ必要。南部、レジスタンスの攻撃二つ。イスラエルはアイネヘルワ空爆。

一一月二九日

・ガザ、軍がタカの指導者三人を逮捕。人民はこれに対し闘いを展開。タカは、武装闘争再開を宣言。

・カドウミ（国連総会で）、パ難民の帰還、賠償の権利、すなわち国連決議一九四の遵守を。イスラエルは武装入植者の行為を停止させるべき。

一一月三〇日

・ガザ、一歳の少年が射殺され、八〇人負傷。他方、報道協会は軍の報道関係者へのあいつぐ弾圧、暴力行為に抗議。

一二月一日

・ガザ、二歳の少年が射殺され、八〇人負傷。ハマスのビル、これはイマド・アカルなどの血への報復＝五章計画のその一である。

・PLO執行委、アブ・マーゼン、ラボなどがボイコットして開催できず（本文参照）。

一二月二日

・ガザ、人民の大規模な闘い。ファタハのビル、インティファーダ＆武装闘争は正当で包括的な和平が成立しないかぎり停止されない。

・他方、西岸の入植者、入植地の倍増を宣言。乱暴と警察への不服従宣言（本文参照）。

一二月三日

・西岸、入植者の乱暴、パ人が対応。入植者は乱射。占領軍は知らぬふり。

一二月四日

・クリストファー、中東歴訪開始（本文参照）。

・ガザ、イスラム大学生自治会、ハマスが圧勝。

・西岸、人民の闘い、四人負傷。入植者の乱暴で三人負傷。

一二月五日

・PLO執行委、交渉の監督委を設置、アラファトにタガ（本文参照）。アブ・マーゼン、それでもまだアラファートの独裁的であることに変わりはない。

一二月六日

・テルアビブ地区、サブマシンガンでのバスへの攻撃、ユダヤ人一人死亡、攻撃主体も射殺された（三月末の封鎖以来、初めての事件）。

一二月七日

・被占領地、ヘブロン地区で入植者への攻撃、入植者二人死亡三人負傷。エルサレムではバスへの攻撃、イスラエル人一人負傷。他方、人民の闘いに対するイスラエル軍の乱射、一人死亡。また、入植者の乱暴づく。

一二月八日

・アラファート、エルサレムを共通の首都にとよびかけ。

一二月九日

・被占領地、ゼネスト。ガザ、入植者への攻撃（負傷）。他方では、入植者の乱暴、ラマラ地区でパ農民が射殺された。

一二月一〇日

・クリストファー、シリア、レバノンは和平過程の再開に合意と発表。レバノンでは米国への非難の声起きた。

一二月一一日

・ブエズ、国連人権宣言記念日に際して、ガリに、南部などのレバノン囚人の人権問題への介入をよびかけ。

一二月一二日

・ガザ、入植者への攻撃（負傷）。ヘブロン地区、入植者の乱暴、パ三人死亡。（九・一三以降の死者、パ・三八人、ユダヤ・一八人）。

・南部、レジスタンスの攻撃、イスラエル兵一死。

・ハバシュ、投降はアラファト自身が後悔することになる。和平は人民がパレスチナに帰還し、大衆的で民主的な状況に至ることである。

・ブエズ、米、ロシア、ノルウェイの和平過程からの四二五の削除策動を非難。また、国連決議一九四も含めることの大切さを強調。

一二月七日

・被占領地、入植者の乱暴。ガザ、ファタハ支持の僧侶射殺された。

一二月八日

・ラビン、二三日の合意実行は無理。

一二月九日

・被占領地、入植者への攻撃、一人死亡。ガザ、「特務」による活動家の射殺。そして、占領軍の大増強。

一二月一〇日

・アラファート、エルサレムを共通の首都にとよびかけ。

一二月一一日

・被占領地、ゼネスト。ガザ、入植者への攻撃（負傷）。他方では、入植者の乱暴、ラマラ地区でパ農民が射殺された。

一二月一二日

・クリストファー、シリア、レバノンは和平過程の再開に合意と発表。レバノンでは米国への非難の声起きた。

一二月一二日

・ブエズ、国連人権宣言記念日に際して、ガリに、南部などのレバノン囚人の人権問題への介入をよびかけ。

一二月一二日

・ガザ、入植者への攻撃（負傷）。ヘブロン地区、入植者の乱暴、パ三人死亡。（九・一三以降の死者、パ・三八人、ユダヤ・一八人）。

一二月一二日

・南部、レジスタンスの攻撃、イスラエル兵一死。